

刊行のご挨拶

このたび、森田を代表者とする、研究課題「13、14世紀東アジア諸言語史料の総合的研究 元朝史料学の構築のために」に、平成16～18年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）が、交付されることになりました。本研究の趣旨について、申請書にも書きました内容を要約しますと、次のようになります。

研究題目にいう13,14世紀東アジアとは、モンゴル帝国とその領域における先行国家である宋、金や西夏を指す。昨今の東アジア史研究において、元朝史研究、モンゴル帝国時代史研究が盛況であることは、各種の学界展望の類で指摘されているところであるが、その背景には、多数の若手研究者の台頭とともに、各種の新史料の学界への紹介がある。すなわち、中央アジア発現の古文書類、中国を中心とする石刻史料類、さらには中国、朝鮮、西夏、ウイグルなどにおける各種の版本類の発見と、それによる旧知の史料の再評価である。しかも、当該地域への旅行の自由化にともない、現地における現物資料の調査が可能になったことで、二次三次文献に拠っていた従来とは、研究環境が大きく異なりつつある。本研究においては、13,14世紀の東アジアにかかわる諸言語史料を、たんに文字情報として読み取るだけではなく、その文字の存在するモノそのものをも史料として扱うために、各分野の専門家の協力による総合的な史料学の構築を試みる。

実際にこれだけの内容を実現するには、我々の人数は少なく、その専門分野がカバーできる範囲は狭いため、その力はあまりにも微々たるものではありませんが、20年にわたって継続されてきた「世祖本紀の会」や、「石刻資料の会」での経験を基礎として、地道に活動を積み重ねていきたいと存じております。当面は、従来からの蓄積がある石刻の比重が高くなるとは存じますが、少しでも対象とする史料の範囲を広げていきたいと考えております。

史料学の分野はどの時代でもそうなのでしょうが、13,14世紀東アジア研究においても、日進月歩とは申さないまでも、たえず新しい史料が紹介されていきます。そこで、研究最終年度の成果報告書を待つことなく、少々荒削りでも我々の仕事の一端を皆さんにご報告し、また研究情報を共有するために、このニューズレターを発行することを思い立ちました。また、このような趣旨の雑誌ですので、この科研のメンバー以外の内外の研究者の皆さんからのご投稿も歓迎いたします。この時代の史料に関心をもたれる方々の交流、情報交換の場として、何かのお役に立てば幸いです。最後になりましたが、今後とも、みなさまのご支援のほどをお願い申し上げます。

2004年9月

研究代表者 森田 憲司